

Crohn 病, 潰瘍性大腸炎における内視鏡生検組織内の IgG, IgG1, IgG2 の測定

Immunoglobulin G (IgG), IgG1, and IgG2 determinations from endoscopic biopsy specimens in control, Crohn's disease, and ulcerative colitis subjects: *Rüthlein J, et al* (Gut 33: 507-512, 1992)

慢性の炎症性腸疾患の急性増悪では粘膜内の IgG 陽性細胞の数が増加することが特徴的であるが, 炎症性腸疾患における非炎症性粘膜では増加しても中等度か, 全く増加しないかである。

著者らは対照群と様々な患者群における IgG および IgG1 の産生を,

in vitro で測定するために, 腸管の単核細胞を生検標本より十分量採取した。

測定の結果, IgG2 は Crohn 病や潰瘍性大腸炎のみで測定できたが, 対照群の濃度は ELISA 法で測定感度以下であった。

一方, 著者らは IgG や IgG1 の産生が両疾患において, たとえわずかな炎症であっても, 対照群と比較すると局所の炎症の程度と相関していることを発見した。IgG1 の比率は, 両疾患とも炎症の強い粘膜では顕著に増加していた。

そして Crohn 病と潰瘍性大腸炎の粘膜の主たる相違は炎症が軽いかない部位においてみられた。IgG1 と IgG の比は緩解期の Crohn 病で

は対照群と同じであったが, 潰瘍性大腸炎の場合では緩解期でも著明に増加していた。一方, IgG2 と IgG の比は潰瘍性大腸炎では 0.12 で, Crohn 病では 0.19 と顕著な差を認めなかった。

この結果は局所の IgG や IgG1 の産生は炎症の度合いに依存しており, 潰瘍性大腸炎の IgG1 の増加は緩解期を含むすべての時期で見られることを示している。これらの所見は異なる免疫調節機構が Crohn 病や潰瘍性大腸炎に存在するという仮説を支持している。

(愛知県がんセンター消化器内科

高木 篤 抄)